古川叢書

中河与一

中河与一歌論集

古川書房

古川叢書

中河与一

中河与一歌論集

古川書房

中河与一（なかがわよいち）

明治30年香川県坂出市に生まる。早稲田大学英文科中退，新感覚派運動を起す。小説には「天の夕顔」「失楽の庭」「探美の夜」「鏡に入る女」などがあり，「天の夕顔」は英，仏，独，米，中，スペイン語などに訳さる。登山家としても有名。歌集に「中河与一全歌集」評論に「万葉の精神」などがある。

現住所　世田谷区成城7－6－5

中河与一歌論集　〔古川叢書〕

1978年4月20日　印　刷　¥1200
1978年4月31日　発　行

著　者　中河与一
発行者　古川篤夫

発行所　古川書房
東京都大田区上池台4—29—3
電話・東京（729）2556
振替番号・東京5-45774番

©1978

印刷・信陽堂印刷　製本・東雲堂
（落丁・乱丁本はお取り替えいたします）
0095—0213—7444

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

万葉ギリシャ……一
一、万葉への回帰　一
二、海の思想　三
三、真に貫くもの　七
短歌の新時代とその美学……一〇
無償の芸術　一〇
歌に憑かれた人　一三
形式の問題　一四
客観主義　一六
新古今の系譜　一八
歌論のない歌壇……二六
八つの問題……四一
和歌に於ける伝統……四九
相聞百首選……五七

女童の歌……六六
筏井嘉一の歌……六九
「悲母」の歌……七四
俳句随想……八九
宗祇の系譜……九五
芭蕉の系譜……九九
「春風馬堤ノ曲」その他……一〇四
芸術至上主義……一一三
あきれた文章……一一三
東中野塔の山三九九番地の頃……一二六
歌人に与へる書（一、二、三、四、五）……一二八
愛国と風景歌……一六五
海の思想と万葉集……一七一
赤人に於ける古今的なるもの……一七九
子規に於ける古今和歌集……一九一

三十一字形式に於ける民族的直感……一九六
私の短冊趣味……二〇二
人麿碑由来記……二〇九

万葉ギリシャ

一、万葉への回帰

ある小説の中に人麿の歌を引き、それが機縁になつて、私は再び万葉集の中に入つてしまつた。この驚嘆すべき歌集の中にこそ、日本人の本当の芸術と生き方とがあることをいよいよ信念しだしたからである。

今日、吾々は純文学がつまらぬとか、大衆小説がどうしたとか、教養がどうであるとか、誰れ誰れの書斎に何々が置いてあつたとか、言つて見れば愚にもつかぬことを論じてゐる。だが、そんなことなんか、実はどうだつてよいのである。

真に文芸を求め、尊敬してゐる者にとつて、かくの如き啓蒙は最早不必要でしかない。

吾々は何故に、そんなことを論じてみる暇に、もう一度万葉集を読み、その真率の歌に驚き、千古不抜の作家達に親近しないのか。彼等の持つてゐた思想と、彼等の全力的な詩情に新しい発見を試み

ないのか。

文芸とはかくの如きものであつて、書斎の計算でもなければ、功利の友情でもない。一片貫かうとする真摯の熱情によつて終始することのみが、芸術の精神でなければならぬ。近世に於ける鷗外も立派であつたし、漱石も羨望すべき存在であつた。然し彼等は彼等であつて遂に吾々ではない。

ゲーテはギリシャと言つた。ジイドはギリシャに奴隷が無かつたらと言つた。

だが吾々にとつては、実はそんなことはどうでもよいのである。万葉の時代にも何か奴隷的なものはあつたであらう。だが吾々の万葉人はギリシャ人の如く美を愛し、然も、貴人より辺土の遊女、乞食に至るまで、こぞつて一つの歌集に和して悲痛の感情を歌つてゐるのである。私はギリシャを思はんよりは、万葉の持つてゐる壮烈雄渾の気風を、今日の停滞した文芸の世界にもたらしたいと思ふ。

万葉人はギリシャ人と同じく、神を尊敬し、人間生活を肯定し、欲望を讃美し、仏教思想の影響はあつても、直情によつて恋愛し、悲しみ、現実を生き、とりわけ美と共にあることを何よりも誇りとした。燦然たる唐文化の影響を烈しく吸収しながら、その中に最も日本的なヘレニズムの性格を屹立した。それはギリシャ的な多神教の肯定的な世界であつた。

あしひきの山河の瀬の響るべに弓月が嶽に雲立ちわたる　（人麿歌集）

淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば心も萎ぬにいにしへ思ほゆ　（柿本人麿）

雄大の響鳴、哀婉の追憶、湧きあがる自然への人格的合同、現人神として天皇によせるかなしい思ひ。そのリズムの中にある美しさには、堪へがたいまでの嘆きが呼吸してゐる。

誠に彼等こそは美を中心として生活し、思想し、政治し、歌つたやうに思はれる。

それ故に天皇より庶民に至るまでが、二十巻の歌集に同居して悲痛の感情を述べ、吾々をしてその時代を思はすのである。

私は今日の文学が何よりも取りかへさなければならぬものは、万葉にあつた精神であると思つてゐる。かつて人々は幾度か言つた、ヘレンの精神をと。然し吾々は万葉を、と叫びたい。万葉こそは東洋に於ける明らかにギリシャであつた。それは西方の肯定と東洋の積極とを含んだものとして不思議な輝きをもつてゐる。

二、海の思想

万葉集の特質に就いてなら、すでに多くの所説が存在してゐる。

敬神の心情を述べるべきか、ひたぶるの詠風を言ふべきか、雄渾の調を言ふべきか、その地理の辺土に及んでゐることを言ふべきか、美の精神を言ふべきか、題材の豊富について述べるべきか、それは何からでも無数に枚挙せられるにちがひない。

私はかつて「日本の精神なら万葉集につくべきである」と言つたことがある。また「漫然と民族を言ふよりは万葉集を読む方がよい」とも書いた。然しこれは何も血統にこだはつて言ふのではない。率直に世界文学の中に於てこれを見、反省すればよいのである。かくの如く厖大に、且つ男も女も貴族も庶民も一つの歌集の中に同居してゐる例を世界の何処にも見出すことは出来ない。

此頃、私小説が打倒せられ、心境小説が攻撃せられてゐるのをよく見かける。だが問題はそれらよりもさきにある。さういふところに逃避せねばならなかつた日本文化の衰弱の状態を嘆くのである。

如何やうな理論をおいても、私はそれらの小説に、少なくとも万葉的な伝統が断絶してゐるといふ意味で、一つの文化史的な立場から嘆くのである。

そしてかくの如き自覚をハツキリと所有するために、私流の独断ではあるが、最も重大と思はれる万葉集の一特徴に触れたいのである。

燈火の明石大門に入らむ日や榜ぎ別れなむ家のあたり見ず　（柿本人麿）

天ざかる夷の長道ゆ恋ひくれば明石の門より大和島見ゆ　（柿本人麿）

家にてもたゆたふ命浪の上に浮きてし居れば奥処知らずも　（作者不詳）

これらの歌の持つてゐる精神は海への驚きであり、航海の悲劇である。中には遣唐使の歌の如きも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

散見するが、とりわけ柿本人麿は、幾度となく内海を航海して、神代を追想して多くの歌を残してゐる。当時遣唐使の船でさへ長さ六、七間にしか足りなかつたといふから、人麿たちの船はもつと小さく、航海は決してなまやさしいものではなかつたにちがひない。そのことを思つて読みなほすと、海に向つた時の彼等の心緒の高揚と、勇猛とが、更にハツキリと歌を通して吾々に感じられるのである。或る学者は黒曜石を通して「日本人は世界最古の海洋民族であつた」と仮説している。

それは万葉の総ての歌の背後にあるものであつて、吾々の今日反省すべき気質である。

ボードレールは「自由なる人、永遠に海を愛さん」と言つてゐる。海は自由であり、変化であり、冒険であり、離脱であり、雄図である。ヴァレリイは「澄みわたつた空や、明るく、くつきりした水平線や、優雅な海岸線は、人間が生活し、文化が発達するための一般的条件であるのみならず、それらは人間に作用して、思想そのものと殆ど異らない特殊な、知的な発達を刺激する要素なのである」と言つてゐる。

それはオデッセイの背景をなす海洋の歌と同じやうに、一つの新しい空想を地上の生活に与へるものである。

然し不思議なことには、万葉人の持つたこの海に対する高揚と勇猛の精神は次第に衰微し、歴史を通じて万葉以後西行法師に見るだけでそれは殆ど跡を絶つてしまつたのである。古今集にも、新古今集にも、それ以後の撰集にも、また物語にも随筆にも、殆ど海の文芸は姿を消してしまつたのであ

る。わづかに秀吉が海を越えようとし、その後の和寇が止みがたい私情をもつてその血統を示したのにすぎなかつた。

かくて万葉集以後、海の歌が消え去ると同時に、日本の文化は神々の世界から遠ざかり、外戚によつて摂政せられ、武門によつて専断せられ、次第に陰欝と混沌とを加へたことは何と解すべきであらうか。

その最も究極したものが徳川文化であり、徳川二百六十五年の治世は鎖国といふ言葉をさへ作つた。鎖国がよかつたか悪かつたかは言はない。だが何れにしても人間渡海の欲望を禁圧するところの思想が浪曼精神への最も激しい抑制であり迫害であつたことは言ふまでもない。

その意味で私は鎖国文化の中に起つた消極的な文化形態は、今日一応これを批判し、考へなほしてみる必要があると思つてゐる。

然も徳川文化の芸術意識は言ふまでもなく、戯作者気質であり、町人趣味であつたのである。この時代を代表する絵画は国外の印象派に非常な影響を与へた浮世絵であり、黄表紙であつた。それは必ずしも高い芸術意識とは言へない。私は孤峭芭蕉や、哀婉近松をさへも、一応この観点に於て考へてみたいのである。ただ彼らに於ては、時代に対する芭蕉や近松らしい最も強烈な批判と抵抗とがあつて、それが異常な密度を発揮させたと考へてみるだけで、吾々は再びそれらの原点万葉を取り返し、海の思想をもつ新しい文学精神を、吾々のギリシャを、ハツキリと呼びもどしたいのである。

三、真に貫くもの

吾々は日にも日にも、今日の文学に於ける廃落を説明する多くの文章をみる。先日も誰れかが「作家の質の低下」を云々してゐるのを読んだ。

それは思想的に言へば、昨今の必然思想による決定論的客観主義乃至唯物論のために、文芸が詩の翼を失つたためであり、また文化史的に言へば、単純な模倣によつて日本文化が植民地化せられてゐるといふことである。更にもう一つは、徳川文化の遺産の中になほ吾々が低迷してゐるといふことに他ならぬ。

心境小説といひ、私小説といはれるものは、明らかに等しく江戸時代の心境、さびの芸術観を基本とするものであつて、然もそれに至らない折衷的芸術意識の保存でしかない。このことを自覚しなければ、恐らく新しい文学への熱情は起るまい。

先日正宗白鳥氏は、今日の流行を嘆いて「吾々の芸術は今に、さびや、幽玄や、もののあはれになつてしまふだらう」と言つてゐられた。

あの正宗氏の言説の皮肉には、私も甚だ同感であつた。もつともこれらの中世以後の芸術論の背後にも、勿論強い日本的乃至は東洋的風土の精神の底流してゐたことは認めるが、吾々の芸術を、それ

らのさびや、もののあはれの表面に現はれたものだけによつて考へてはならない。むしろそれらの背後に沈潜して守られた古来からの精神を忘れてはならぬのである。吾々は何よりも鎖国文化の残滓としての小説、植民地文学としての知性主義、国土への否定を意図しようとするやうな芸術論に対しては、何処までもこれを批判しなければならぬ。吾々は吾々の文芸を、もつと雄図し、離脱し、冒険するところのものにしなければならないのである。

吾々にとつてのギリシャ、万葉の精神を思ふことによつて、吾々は再び吾々の文芸を高揚せしめなければならない。地上に於ける最古の古典として、真に芸術を芸術しようとしたものは、誠に万葉人とギリシャ人であつたと言つても言ひすぎではない。詩経にあるものはなほ一つのモラルから脱せず、旧約や仏典にあるものは来世への求めであつて、それらは人間を人間として肯定し、吾等の栄光の日を樹立しようとした万葉やギリシャの芸術精神とは何か違つて考へられる。大陸文化の特徴は専制体制といふことであり、独裁者の恣意といふことであつた。

私は先きに偶然論といふものを言ひ、現代思想に一つの敬虔なる驚異の感情を導入しようとした。それは流転永生するものとしての人生を経験し、認識することによつて、吾々の生活を切実にしなければならぬといふ意味からであつた。

今万葉人の性格の中にある直情を思ひ、その表現の微妙を思ひ、当時に於ける不思議なデモクラシー思想を思ひ、彼等の切実なる生活の中にあつた驚きの心情に思ひ至つて、私は自分の偶然論に於け

る性格を其処にみた。彼等は常に驚き、永遠をみた。それは教養でもなければモラルでもない。まして卑俗な社会への文学の押しつけなどではなかつた。

真の文芸は「文芸、文芸」と言はなくとも浸潤するのである。そのことに何の不思議もなく何の奇怪もない。

吾々は人麿や赤人やその他の歌人達の詩歌の思想や表現にも、明らかに中国文化の大きい影響をみる。然し彼等はそれによつて偉大なのではない。それ以上に彼等は貫いてゐるのである。そこにあるものはもつと自由な日本であり世界である。真に切実の感動を以て貫く者のみが本当の文学者なのである。

吾々は何人(なんぴと)の名前を列ね、何人の原理を述べずとも、自らの性格を自覚し、日本の精神を奪回することによつて、熱情をもつて今日に生きればよいのである。百万遍浪曼精神を言ひ、リアリズム精神を叫んでも、真に貫く者には何とも及びがたいのである。

私は今日最も欠乏してゐるところの万葉の精神を再び持ち来たすよりほかには、今日の文芸は道がないと思つてゐる。日本の文化は常に万葉への回帰と共に興隆し繁栄しなければならない。

久松潜一氏は、その一書の中で言つてゐられる、「出発点として必須なものを、古代に摑まなければ、日本としての創造発展は不可能である」と。妥当な意見であつて、何人といへども、もう一度そのことを考へてみなければなるまい。

(昭和十一年七月三十日)

短歌の新時代とその美学

無償の芸術

新年号の「短歌」ならびに「短歌研究」を散読しながら、戦後、顕著な符節として感じられたことは、歌壇の最も優れた批評家達と思はれる人々、窪川鶴次郎、木俣修、大野誠夫、坪野哲久、岡山巌など或ひは短歌は滅亡しはしないかといふことを公言してゐるらしいといふことであつた。

これを読みながら実は私は不思議の感に囚はれた。左様な認識の上に立つて、芸術上の制作といふものが果して出来るものであるかといふことを疑つたからである。一体どういふ心理に於て歌人達は歌を作つてゐるのかと疑つた。

芸術といふものは常に次善や三善のものでは困る。常に第一級を目ざしてゐない限りそれは存在し得ないものではないかと思ふ。少くとも左様な意気込みに於てのみ制作することが出来るし、存在し得るものであると思はれる。

然るに歌壇の諸氏はみづから短歌を卑下し、それを第二芸術の分類にみづから押し入れようとしてゐるかに思はれる。多くの歌人達は第二芸術論が現はれた時、多少これに反論したやうであつたが、事実に於てみづから第二芸術としての短歌に甘んじようとしてゐるかのやうにさへ思はれた。

第二義の仕事として、金銭のために作る作品、みえのために作る作品、たしなみとして作る作品、自己満足のための作品、といふものが考へられる。そしてさういふものは小説にも絵画にも短歌にもあるにちがひない。然しそれが少くとも芸術として存在するためには、決してさういふ心がけでは制作出来ないのではないかと思はれる。もつとも金銭のために作る作品といふことは短歌の場合に於てはありやうがないかもしれない。してみると、それはみえのためか、たしなみのためか、小さい自己満足のために作つてゐるといふことになりかねないのである。

若しそれが事実とすれば、これは、今日の歌人にとつて重大であり、最も危険なことであるにちがひない。

詩歌といふものは無償の芸術である。フランスに於てもアメリカに於ても、詩人達が多く経済的に報いられないといふことは日本の場合と決して変つてはゐない。然し彼等は詩歌といふものの生命を知り、それに誇りと自信とを持つてゐるが故に、小説に及ばないとも映画に及ばないとも言はない。

萩原朔太郎は、PENクラブといふものはポエットとエッセイストとノベリストの集りであるが、ポエットを最上に置いてゐることには意味があると、よく冗談のはしに言つてゐた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.